令和４年度第１回
東京都総合教育会議議事録

日時：令和４年 10 月 27 日（木）17：06～18：08

場所：都庁第一本庁舎 42 階特別会議室 B

○浜教育長　ただいまから令和４年度第１回東京都総合教育会議を開会いたします。

本日、新井委員はオンラインでの御参加でございます。

初めに、傍聴について申し上げます。本日は、朝日新聞社ほか 11 社からの取材と１名の傍聴の申込みがございました。許可してもよろしゅうございましょうか。

（「はい」の声あり）

○浜教育長　ありがとうございます。では、入室を許可いたします。入室してください。

（報道関係入室）

○浜教育長　プレス・傍聴の皆様に申し上げます。あらかじめ控室でお伝えいたしました傍聴要領に定めるルールにのっとって御参加いただけますようお願い申し上げます。

それでは、開催に当たりまして、小池知事より御挨拶を頂戴したいと存じます。お願いいたします。

○小池知事　小池でございます。本日、教育委員の皆様方にお集まりいただいております。ありがとうございます。そして、日頃から東京の教育の充実に対しまして多大なる御尽力を賜っておりますことに改めて感謝を申し上げます。

都におきましては、今年７月、「未来の東京」の実現に向けた重点政策方針 2022 を策定いたしております。成長を生み出す社会の実現や子供政策の充実などを掲げております。また、コロナ禍におきまして深刻化いたしました子供・子育てをめぐる様々な課題を、子供政策連携室を中心といたしましてチルドレンファーストの政策を総合的に推進いたしております。

御承知のように、今、世界の動きは極めて速く、そしてまた技術も日進月歩で進んでいるところでございます。このように激しく変化する環境におきましても、子供たちには思うままに未来を描き、そしてグローバルな素養を磨くことによって視野を広げる、そして自ら切り拓く力を身につけてほしいと思うものでございます。

本日は、都立高出身で、日本貿易振興機構にお勤めで、現在は国税庁に出向中の古賀大幹さんにお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。古賀様から、日系企業の海外展開の支援などを通じて感じられたこと、そしてまた、今後生徒の皆さんに求められる力とは一体どういうものなのか、お話しいただきたいと思います。

いつの時代も未来を切り拓くのは人でございます。子供たちこそ未来そのものと言えましょう。子供たちの能力を最大限に伸ばす学びの実現のために皆様から忌憚のない御意見を頂戴したいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございます。

○浜教育長　ありがとうございました。

それでは、改めまして本日の講師、古賀大幹様を御紹介させていただきます。ただいま知事からもお話がございましたように、古賀様は都立日比谷高校の卒業生でいらっしゃいまして、大学卒業後、日本貿易振興機構（ジェトロ）に勤務していらっしゃいます。本日御講演を頂くことになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、本日のテーマでございます「グローバル人材の育成」に関する現状や都教育委員会の取組について私から御説明をさせていただきます。

資料を御覧いただきたいと存じます。新型コロナウイルス感染症との闘いが長引く中、世界の経済成長は大幅に落ち込み、国内産業も大きな打撃を受けました。そして、全世界的にデジタルトランスフォーメーションが加速し、日本ではデジタルの遅れが顕在化いたしました。また、人とのコミュニケーションの在り方が変化し、働き方や学び方も大きく転換しました。さらに、世界的なサプライチェーンの混乱やウクライナ情勢に端を発するエネルギー問題など国際情勢はいまだ不透明な状況にあります。

こうした状況を踏まえて、「未来の東京」戦略では、目指す 2040 年代の東京の姿として、言葉の壁を超えてグローバルに活躍する人材を輩出することや、日本と外国の子供が共に学ぶこと、優秀な留学生が集まりイノベーション人材を多数輩出することなどを描いています。こうした未来像を実現し、国際競争の新たな局面を捉え、世界をリードする国際都市として発展していくことを目指しています。

一方、日本の現状に目を向けますと、2021 年の英語能力指数ランキングにおいて、英語を母語としない 112 の国・地域のうち、日本は 78 位、英語力が「低い」レベルと判定されました。アジア 24 か国のうちでは 13 位となっています。また、科学技術・学術のレベルを表す指標として研究論文数の国際比較を見ますと、約 20 年前には日本の論文数が上位を占めていましたが、直近の 2018 年～2020 年の結果では論文数で５位、中でも注目される論文数では 12 位となり、上位を諸外国に席巻されている状況です。

また、OECD 等の統計によりますと、学位取得を目的とした日本人の留学生数は 2004 年をピークに約３割減少しています。近年は少しずつ増えていましたが、2020 年にはコロナの影響により大幅に減少しているとの調査結果もあります。一方、我が国を除く諸外国の海外留学者数は 2002 年以降増加傾向にあります。こうした現状を見ますと、ツールとしての英語力の習得がまだ十分ではないことや若者を中心にいわゆる内向き志向にあることがうかがえます。

こうした状況を踏まえて、都教育委員会では、体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」の開設や JET プログラムによる外国人指導員の配置、学習教材を提供する TOKYO ENGLISH

CHANNEL の展開などを通して実践的な英語力向上に取り組んできました。その結果、令和３年度の都内公立学校の生徒の英語力は４年前と比較して向上し、英検３級程度とされる CEFR A１相当以上の英語力を持つ中学生は 54.4%、英検準２級程度とされる CEFR A2 相当以上の英語力を持つ高校生は 50.0%となりました。この結果は全国平均を上回っています。

また、都立国際高校に国際バカロレアコースを開設し、現在、第５期生まで送り出していますが、国際バカロレア資格の取得率は第３期生以降 100%、平均スコアは毎年度世界平均を上回り、海外大学にも多数合格者を出しています。さらに、教員の指導力向上に向けて海外派遣研修等を実施してきました。その結果、英語の授業で発話の半分以上を英語で行う教員が特に中学校で増加しています。

そして、実践的な英語力の更なる向上に向けて、英語を学びたい人やグローバル人材育成に係る取組について知りたい人がいつでも情報収集できるポータルサイト「Tokyo GLOBAL Student Navi」を 12 月末に新たに公開する予定です。グローバル人材育成に向けたムーブメントを醸成するとともに学習者の学びを支援してまいります。

次に、都立高校生の海外派遣に関する取組です。これまでは次世代リーダー育成道場を実施し、毎年約 200 人の高校生を北米・オセアニア方面に 11 か月間派遣してきました。また、東京体験スクールとして都立高校に海外の留学生を受け入れてきました。

次世代リーダー育成道場修了生の追跡調査によりますと、回答者の９割以上が「様々な場で自分の思いや考えを積極的に伝えている」「相手の意見や価値観を尊重し、受け入れることができる」と回答しており、「思春期の多感な時期に多様な価値観を持つ人と生活を共にしたことで他人を受け入れ、尊重できるようになった」などの感想を述べています。

また、都立高校生の意識調査においては、「外国の人々と交流したい」と思う高校生が５年前と比較して 10 ポイント以上増加しています。一方、「将来国際社会を舞台に仕事をしてみたい」と思う高校生は３割程度であり、10 年前と比較しても横ばいの状況です。

異文化を理解し、多文化共生社会の実現に向けた意識を醸成するとともに、他者と協働して世界的な課題の解決に取り組む姿勢を育んでいくために、今年度はさらに３つの海外派遣事業に取り組んでいます。１つ目は専門高校生の海外派遣事業です。工業・農業・商業に関する学科の生徒を海外に派遣し、技術や開発の取組を直接見聞する機会とします。２つ目はオリパラ教育継承事業です。オリパラ教育の成果をパリの子供たちへ継承することを目的とし、豊かな国際感覚の醸成を東京 2020 大会のレガシーとしてさらに進めてまいります。最後に多文化共生推進事業です。多文化共生という観点から、英語圏以外の国へも派遣交流を展開してまいり

ます。また、同世代の生徒を受け入れて都立高校生との交流を深める予定です。

今年８月、UAE の高校生が来日した際、都立高校の生徒と交流した映像がございますので御覧ください。

（動画再生）

今後も、海外における実体験や国際交流を通じて自らの学びを世界につなげ、豊かな国際感覚を育む取組を進めてまいります。

現状の取組については以上でございますが、最後に今後の方向性についてでございます。来年度は中学校英語スピーキングテストを経た生徒たちが都立高校に入学してきます。その生徒たちが都立高校でさらに実践的な英語力を高め、グローバルな視野を広げることができるよう、来年度以降、都立高校での取組を大きく充実させていくべく検討を進めております。

施策説明は以上でございます。

続きまして、「これからの国際社会を生きる生徒たちに求められる力」につきまして古賀様からお話を伺いたいと思います。古賀様、どうぞよろしくお願いいたします。

〇古賀氏　よろしくお願いします。

今回は「これからの国際社会を生きる生徒たちに求められる力」というテーマに沿って進めさせていただきます。また、サブタイトルに「完璧主義からの脱却」ということを書かせていただいたのですが、こちらもプレゼンの中で説明できればと思っています。

本日の流れなのですけれども、まず、大変お恥ずかしながら、私の人生を皆さんと一緒に振り返っていきたいなと思っています。そして、その次に本題である「これからの国際社会を生きる生徒たちに求められる力」についてお話ししていきたいと思います。最後に、国際社会と言えば必ず出てくる「英語」なのですけれども、英語について私が思うところを述べたいと思っています。

ちなみに、こちらの写真は、上がドバイ万博の全体の写真で、下が日本館の写真です。私はドバイ万博の日本館に勤めていたので、そのときに撮った写真になります。

初めに、保育園から中学校というところでお話しさせていただきます。実は私の両親は共働きの公務員でして、姉と２人兄弟だったので、いつも姉に甘えて後ろを歩いているような男の子だったそうです。姉と離れて友達と遊ぶようになった小学校高学年ぐらいのときに姉がとてつもなく優秀だということに気付いたのです。姉なのですけれども、勉強は学年トップを常に取り続ける、生徒会の副会長、運動会も地区大会優勝、友達もたくさんいるみたいな非の打ちどころのないスーパー人間でして、周りの大人は私と姉を常に比較するような感じで小さい頃

を過ごしていました。私自身も何とか踏ん張って中学校時代は勉強で上位の成績を取り、また、部活もテニス部と吹奏楽部２つを兼部して週７部活をしているような人間で、ある程度実績も残せたかなと思っておりました。

姉は日比谷高校に行きまして、私も姉を追いかけるように日比谷高校に入学しました。そこまでは何とか面目を保ったのですけれども、姉は日比谷でも上位の成績を取り続けて国立大学の医学部に進学しました。私はもうついて行けなくなりまして、勉強にある意味挫折してしまって、学園祭で主演を務めたりとか、あとは熱血のテニス部に入ったりして勉強以外に精を出していました。その後、青山学院大学の法学部に入学し、最初は弁護士を目指して、「姉は医者だが、私は弁護士だ」みたいな感じで勉強を頑張ろうと思ったのですけれども、憲法の授業が一番最初にあるのです。憲法は今でこそ大切さや楽しさが少しずつ分かってきたのですが、当時は全く憲法がつまらなくて、勉強もそこで挫折したのです。なので、結局また大学でも体育会系のテニス部に入ってテニス漬けの日々を過ごしました。

転機になったのは就職活動でした。それまでは家族と海外旅行に１～２回行ったことがあるぐらいだったのですけれども、このときに海外に目を向けたということになります。当時、部活の規律がすごく厳しかったのですが、就職活動はやはり人生がかかっているのである程度融通をしてくれましたので、これを機にとりあえず 100 社を訪問しようと思いました。

100 社を訪問したところ、どの会社も海外戦略について語っていたのです。もともと先輩の助言で鉄道とか電力のような国内のインフラ系を受けようかなと思っていたのですけれども、そういった企業ですら海外展開の話をしているという状況で、海外に行かなければもはや仕事がないのではないかと思うような危機感に襲われました。ただ、やはり勉強していなかったので TOEIC は 500 点程度でした。ただ、取りあえず海外に飛び込みたい、さらに、全企業がそういう海外展開を目指しているのであれば、そういう企業を支援できるようなところに就職したいなと思ってジェトロの門を叩いたところ、運よく採用されました。一番右の写真が、私が尊敬する先輩と撮影した１枚です。

部活を引退してから卒業までの期間に、海外留学などをしていた中学校からの友達のつてで外国人の友人をたくさん紹介してもらいました。左の写真の真ん中の女性がアメリカ人で、真ん中の写真のさらに真ん中の男性が韓国人という感じでございます。あとは卒業旅行でヨーロッパ７か国を周遊したりしました。

ジェトロに入構してバングラデシュとドバイに駐在しました。左下のように、バングラデ

シュのときは若手の日本人にすごく歓迎されまして、あとは左上のように、日本人会のお祭りみたいなところで司会をやらせていただいたり、あとPTA会長なんかもやったりしました。

ただ、海外に行けば外国人とたくさん話す機会があるのではないかと思っていたのですけれども、私の場合は日系企業支援の仕事をしていたので、気を付けないと日系コミュニティだけにとどまってしまうような現状がありました。例えば右下の写真はサンコンさんと撮ったのですけれども、サンコンさんのアテンドをした際も、基本的に日本語でアテンドするような感じでした。なので、そのままでは英語は鍛えられないと思いました。意外とこういう日本人の方、現地に行っても日本人コミュニティの中にとどまってしまう方は結構多いのではないかなと思うのです。なので、私の場合は意識的に海外の方とお話しするような機会を増やしていきました。

高校で学んで海外で生かされたことは、世界史がもしかしたらちょっとあったかもしれませんが、正直あまりありません。ただ、テニスはずっと続けていまして、これが正直一芸レベルになったかなと思っています。

外国人同士の団体戦に入れてもらってチームが優勝したところから、外国人会でも人気者になれまして、通常つてがないと外国人クラブは入れないのですけれども、まさかのテニスが外国人クラブに入れさせてもらうルートになったというところがありました。

「これからの国際社会を生きる生徒たちに求められる力」、本題のところなのですけれども、まず前提として、小池知事も先ほどおっしゃっておりましたけれども、今、世界が目まぐるしく変わっているなと。必ずしも私が経験したことが重要かというと、そうではない可能性もあるのではないかと。やはり時代の流れをつかみながら、今の時代、その先の未来を見据えた能力を開発する必要があるのではないかなと思います。私が未来を見る上で大変参考になったのは、岡田斗司夫さんという方なのですけれども、この方の評価経済という考え方と、あとはフラタニティ（友愛）教育という考え方がすごく分かりやすいなと思ったので御紹介させていただきます。評価経済は、お金より評価のほうが大事になる世界、例えばZOZOTOWNの前澤さんは多額のお金を使ってフォロワーを獲得していきましたけれども、ユーチューバーがそこまでなるのは大変なのですけれども、一定の評価が得られてフォロワーを獲得できれば、そこからお金を稼ぐのは結構容易だったり、あとはそういう形でお金から評価のレバレッジがどんどん上がっていく、そんな世の中が来るのではないか、実際に来ていると思っています。

それから、戦前の国民教育、戦後の市民教育、現代の友愛教育の仕方が変わっていって、その教育方法というのは前世代の教育を否定することから始まるということがあって、国民教育

の人は市民教育の人を理解できないし、市民教育の人は友愛教育を理解できないということ。ちなみに、友愛教育は分与・共生、つまりシェアリングコミュニティとか SDGs みたいな話が出てきていて、私も娘がいるのですけれども、確かにそういう話をよくしているなと思います。世界中が多分評価経済とか友愛教育みたいな方向に進んでいくのではないかなと思うと、私は恐らく市民教育時代だし、あと評価経済の黎明期みたいな状況だったと思うので、少しそれを踏まえる必要があるのかなと思いました。

その中で結論として、さらに私の人生も踏まえて３つの力とその教育方法はどういうものなのかというのを提案したいと思います。実際にこれは今思うと私が高校のときに受けたかった授業でもあると思っています。

まず求められる力としては、とにかく「発信する力」が１つ目です。そのためにはプレゼン大会とかSNS発信なんかをどんどんしていくということがいいのではないかなと思います。やはり均質なものであふれている世の中で評価を得るためには発信をしなければならないと思うのです。完璧でなくても怖がらずに発信する力が必要。ただ、身内だけでやっていると度胸がつかないので、例えば他の都立高校と交流しながらプレゼン大会をやっていくみたいなことが大事ではないかと。

あとSNSの恐怖についてはかなり教育されていると思うのですけれども、そのSNSを使ってどうやって発信していくのかみたいなことも是非教育の現場で教えていただけるといいなと思います。

プレゼンとか発信もやりっ放しではなくて、実際にそれがどのようにレビューされるのか、ちゃんとフォローして、反省をして次に生かすみたいなサイクルをしっかりやらせてあげるといいなと思いました。

２番目ですけれども、「身近な問題を解決する能力」です。海外では日本よりトラブルがあふれています。問題解決能力が必要です。これは無理でしょうと思うようなトラブルは結構あるのですけれども、まずは小さいところから積み上げていくというのが大事なのではないかなと。

先ほども申し上げたとおり、私は小６の娘がいまして、その小６の娘の授業参観で道徳の授業をやっていて、その授業の題材がすごくいいなと思ったのです。簡単にお話しさせていただくと、明日の御飯に困るレベルの売れない手品師がいまして、その手品師が公園で寂しそうにしている男の子に手品をしてあげるのです。そうしたら男の子が喜んで、「明日もまた手品をやってよ」とお願いすると、手品師はそのオファーを受けるのです。ただ、夜、家に帰ると、

その手品師が友達から電話を受けて、「明日大きなビッグショーのオファーが来たぞ。おまえ、出るか？来なきゃ駄目だろ」という話を受けるのです。ですけれども、最終的にその手品師はビッグオファーを断って男の子との約束を守る、そういうお話だったのです。個人的には、そこで終わらずに、どうやったらそれを両立できるかといったところまでしっかりと話し合える教育にしていければいいと思うし、小学生では無理でも、中学校とか高校で同じ題材で自分たちはどうするみたいなところを話し合うみたいなのもすごく面白いのではないかなと思っています。

最後に、「愛される力」としたのですけれども、すごく分かりやすいのですが、シェアしてもらうためにはやはり愛されなければならない。素直でうそがないというのは当然だと思うのですけれども、個人的にはいろいろなコミュニティに顔を出す体力も重要なのかなと思っています。こういった文脈であまり体力というのは語られないのですけれども、その重要性は是非理解したほうがいいのではないかなと思っています。

やはり勉強以外のアクティビティにも参加して、授業後も集中して活動できることを続けていくというのが重要だと思います。

全体的になのですけれども、先ほど申し上げたとおり、どの高校の授業も明確に大学につながるようにしなければいけないのかなと思っていて、私もそうだったのですけれども、今の若者はさらにコスパを求めると言われていて、高校の授業を真面目に受けることで未来が明確に変わるというところを示さないと、ちゃんと真面目に高校の授業を受けないのではないかなと思うのです。やはり試験一発だとテクニックに逃げてしまうというか、なので、どんないい教育プランよりもまずこの辺をしっかり固めていただきたいなと思います。

最後、英語について思うことなのですけれども、英語はやはり道具なのです。なので、例えば私自身も、日本語だと悪気がなくてもふとした瞬間に口走ってしまう嫌な言葉みたいなのがあって、大抵そういうことが相手を傷つけるのかなと思うのです。なので、正直私は英語の汚い言葉をそんなに知らないですし、ふとしたニュアンスの違いで相手を怒らせるみたいなことはないのですけれども、ちょっと英語がうまくなってくると、言葉は道具だからそういう危険性もあるんだよということをちゃんと教えながら英語を勉強していかなければいけないかなと思います。

それから、会話はやはり情熱だと思っています。例えば皆さんが片言の外国人に話しかけられます。そのときに一生懸命その人は話している。それを日本語が変だからといって無視できるかというと、多分無視しないと思うのです。やはりその人の話をしっかり聞きたいと思う。

それは逆も一緒で、私が英語で一生懸命話しかけているときに、うっとうしがられたことは一度もなかったです。なので、まずは完璧主義から脱却してください。英語がまだ不十分だからと思っていつまでたっても話さないと、また英語ができない、話さないというネガティブループがずっと続いてしまうと思うのです。勇気を持ってまずは発言してみると、意外と相手はしっかり受け取ってくれて、そのすばらしさが自分の体験に残って、今度はもっと話したい、もっとつながりたいといういいループになるのではないのかなと思っています。

完璧な人間はそもそもいない。失敗してもいいと思いますし、負けてもいいのです。私は姉に負け続けました。なので、私の言葉を信じていただけるのだったら、それは間違いないかなと思います。

御清聴ありがとうございました。すばらしい機会を与えてくださったことを心から感謝いたします。

○浜教育長　ありがとうございました。御自身の体験に基づく大変リアルで参考になるお話を頂いたと思います。本当にありがとうございました。お人柄もしのばれるお話でよかったと思います。

それでは、これから協議に入りたいと存じます。ただいまの古賀様のお話も踏まえまして、本日のテーマ、「これからの国際社会で羽ばたくグローバル人材の育成」について協議をしてまいりたいと思います。古賀様への御質問もございましたら併せてお願いをしたいと思います。

初めに、国際社会を生き抜く人材の育成という観点から、これからの時代に求められる資質などにつきまして御発言をお願いしたいと存じます。恐れ入りますが、議事の進行上こちらから順番に御指名をさせていただきますので、すみません。限られた時間ではございますが、御発言いただきたいと思います。

では初めに、山口委員からお願いいたします。

○山口委員　古賀様、ありがとうございました。御自分の人生のところが半分以上というか、ただ、恐らく育ってこられた過程で、御両親様であったりお姉様であったり、非常に温かい支援を受けながら背中を押されて今があられるのかなというのをすごく感じました。

また、共感できるところもたくさんありまして、今日私が発言しようと思っていたのですけれども、英語は道具であるとか、あるいは情熱といったところで、やはり国際会議などに参加いたしますと、英語を母語としない国の方が非常に堂々と、そしてまた発展途上国の方なども発言されることがすごく多くて、やはり伝わってくるのは情熱だなと思います。言いたいことがあるから、言葉が完璧でなくても伝えたいという気持ちが伝わってくるので、そういったと

ころを日本の子供たちにも伝えていきたいな、そんな人間を作りたいなと思っています。

また、海外で経験するのは、先ほどもありましたが、やはり予期せぬスケジュール変更であったり、小さなトラブルの連続、そういった中でストレスをあまり感じずに、身を任せてというのではないですけれども、小さなそういったトラブルにどう対応していくかというのは非常に必要だなと思いました。

そこで、私が考えるところは、やはり他の人とは違った意見であったり行動だったりというのでも表現できる、そんな子供たちを育てていきたい。その上で教育現場ができるところは、日本の子供たちは自己肯定感が低いと言われていますが、自信を持って自分の発言であったり行動ができる、そんな子供たちを育てていかなければいけないと思っています。

それから、日本では、オンタイムで行動すること、几帳面さがすごく大事だとされていますし、そこは大切だとは思いつつも、やはり計画どおりにいかないことは人生でもありますし、世の中たくさんあるということ、そういった変化であるとか意図しない変更などに柔軟に対応できる、そういう子供たちを育てていきたいなと感じました。

以上です。

○浜教育長　ありがとうございます。

では、北村委員、お願いいたします。

○北村委員　古賀さん、本当にありがとうございました。とても温かいお人柄が伝わってくるお話で、こういう方をしっかり都立高校は卒業生として送り出しているのだなということで、東京の教育の良さを改めて感じさせていただきました。

特に共感したのが最後の、失敗してもいいというお言葉です。私も、失敗に負けないことが大事だと思うのです。失敗してもいいから思い切りチャレンジしていく。今、山口委員の自己肯定感という言葉がありましたけれども、やはり学校で、家庭で、地域で、子供たちが失敗しても、そこをまた頑張ろうと応援してもらえる社会とか空間、環境を作っていくことが大事だと思いますし、東京の学校の中でそういったものをしっかり作っていきたいなということを思っています。

その意味で失敗に負けないということと同時に、いろいろな価値観があってもいいんだ、いろいろな人がいていいんだということを感じてもらって、１つの正解にとらわれないことも大切だと思います。どうしても１つの価値や１つの正解にこだわると、それがうまくいかなかったときに挫折感を覚えてしまうわけですが、これもあればあれもある、他もあるというふうに多様な生き方とか価値観、考え方がある。ダイバーシティ＆インクルージョンという言葉があ

りますが、そういう社会を作っていくことが、非常に大事なことではないかなと思います。その上で、具体的に、例えば先ほどの都立高校の間でもっと交流したほうがいいのではないか、といった御提案は非常に大事な御提案だったと思いますし、都立高校をはじめ各学校の中での多様性をもっと考えていかなければいけないのではないかなということを強く感じました。

○浜教育長　ありがとうございます。

　では続きまして、宮原委員、お願いいたします。

○宮原委員　古賀さん、ありがとうございました。大変豊かな人生を送っておられるなというのを実感しまして、既成概念にとらわれないチャレンジ精神にあふれた人生でいらっしゃって、多くの後輩の皆さんにお手本の１つになるのではないかと思いながら伺っておりました。

　特に伺った話から言うと、最初はそんなに英語ができるわけではなかったけれども、海外にチャレンジしたというところがグローバル企業に勤める人間としても非常に興味深いところでございまして、恐らく英語だけではない何かを経験されるということを重要に思ってこういったチャレンジをされたのだろう。そういう意味では私どものグローバル企業でも、英語だけではない、ものを発信する力と先ほどおっしゃっていましたけれども、ちゃんと発信できる力、議論ができる力、それからいろいろな経験を積み重ねることによってより自分を深めていく力みたいなところは大変重要だと思っておりまして、そういう多様な意見、多様な経験の積み重ねが恐らく次の人生の扉を開くのだろうと思いますので、こうだから駄目なのだとか、こうだから難しいのだということではない何か強い力が要るのだろうなと思いました。

　それから、完璧主義からの脱却というのに大変感銘を受けまして、どうしても完全なことでないと物を言いたくないとか失敗したくないとかということがあるのですけれども、今は世の中が見通せない時代ですので、それが失敗かどうか、随分先にならないと分からないという時代ですので、やはり失敗だとか変化を恐れないで挑戦するマインドをお持ちでいらっしゃるし、そういった人材を東京都でも奨励して育成していかなければいけないなと思いました。本当にありがとうございました。

○浜教育長　ありがとうございます。

　では続きまして、新井委員、お願いいたします。

○新井委員　新井でございます。古賀さん、楽しいお話をありがとうございました。実は私も弟が一人おりまして、私も弟も同じ都立高校に進みまして、いわゆる私が勝ち続けた姉でしたことから、弟はそのように思っているのかもしれないな、なんて思いながらお話を聞かせてい

ただきました。

ただ、もしも日比谷高校で勉強することを強く強制されて、そこの内申が大学進学に直結するという学園生活だったら、もしかしたら今の古賀さんのようなおおらかなチャレンジ精神あふれる方にならなかったかもしれないなと思うと、強制しなくてよかったのではないかという気が少しいたしました。古賀さんはそのままでとても魅力的な方だと思います。きっとうちの弟もそうだと思います。

ということで、海外に行かれない方はグローバル人材というのは英語力のことだと短絡的に考えがちですけれども、宮原委員もおっしゃったように、真に国際社会を生き抜くには何よりも伝えるべき中身のほうがより一層重要なのだと思います。古賀さんがおっしゃったように、英語というのは１つのツールというか、道具、あったほうがいいですけれども、まずは伝えたい中身があって、それを精いっぱい伝えるというところが出発点なのかなと思います。ですから、東京都で育つ子供たちには、それぞれが伝えたいこと、そして、できれば魅力ある専門性を身につけて説得力を持って伝える人になってほしいなと思いました。

私からは以上でございます。

○浜教育長　ありがとうございました。

では続きまして、秋山委員、お願いいたします。

○秋山委員　秋山です。古賀さん、ありがとうございました。私はこれからの友愛教育も勉強になりました。ありがとうございます。病気や障害があってもなくても、あるいは外国であっても文化の違いであっても、それを受け入れることができる社会の醸成、それから受け入れることができる人材の育成が大切だと思います。例えば車椅子を押すことができたり外国語を話すことができたりするなど、その多様性を受け入れるための心構えや知識や技術を身につけられるような日常的な教育環境を、学校生活の中で整えていくことが必要だと考えています。

ありがとうございました。以上です。

○浜教育長　ありがとうございます。

では続きまして、グローバル人材育成に向けた今後の取組の方向性について御意見を頂戴したいと思います。今回は逆回りで秋山委員からお願いできますでしょうか。

○秋山委員　グローバル人材として必要なことは、自分の考えや気持ちを表現して相手に伝える力を育成することだと思います。それを子供の段階から育てていくためには、まず意見を受け止められる環境を整えることだと思います。子供の声を聞くこと、これは子供たちが、自分の思いは話していい、またそれが受け止めてもらえるということを学び、大人への信頼感をも

たらすし、ひいては自己肯定感を育てることにつながるとも言われています。また、今年７月に開催されました第 46 回全国高等学校総合文化祭東京大会（とうきょう総文 2022）はすばらしい取組だったと思います。学校において様々な文化的な体験をすることで、自分の文化力を高めることが、他国の人々と対等に渡り合える自信につながります。古賀さんはお酒の発信をされていると聞きましたけれども、日本の文化を伝えることができるような土台があってこそ、自分の意見をどのような環境下でも述べることができるという、グローバルな人材の一つの要素を育成するものと思います。

以上です。

○浜教育長　ありがとうございます。

では、新井委員、お願いできますでしょうか。

○新井委員　私は、古賀さんの話から、大きな問題を突然一人で何とか解決するみたいな話ではなくて、まず身近な小さな問題を具体的に解決できる子供が必要だという話がありました。それは私も本当にそうだなと思いますが、そういう多様な国際社会の中での問題解決力、それは国外でということもありますけれども、もちろん国内にも多様な方が入っていらっしゃる。東京は特にそうです。そういう中で問題解決力を発揮する上で、実は英語だけではなくて、地理や世界史、政治経済といったことを学ぶ重要性をこれから生徒に是非実感させたいなと思います。地理や世界史が単に暗記科目となって入試のために勉強していると思っている高校生が少なからずいることを悲しく思っておりまして、やはりこれから特に日本人は、アフリカであるとか成長著しいインドであるとか、そういうところに出掛けていくことになります。そういう国々の文化背景や地理、そういうものを知っていくことでより深いつながりを持てるようになるのではないかと考えております。

以上です。

○浜教育長　ありがとうございます。

では、宮原委員、お願いいたします。

○宮原委員　私の方からは、せっかくこうした都立高校の卒業生の１つのすばらしいキャリアのお話を伺ったので、こういったグローバルで活躍される先輩方のキャリアをもっと知る機会を増やしてあげるというのは重要かなと思います。どうしても親と先生と生徒の間だと、画一的なキャリアの話、大学に進学して企業に就職して、あるいは学校の先生になってというような、今まで我々が知っているような仕事の話が中心になってしまうことがあると思うのですが、今お話を伺って、私も、そういうキャリアの作り方があるのだなとか、こういうところがきっ

かけになるのだなというのを大変勉強させていただきました。こういう先輩たちのキャリアを聞く機会を作る、触れる機会をもっと作るというのは、多分子供たちにとっては非常に刺激的で、新しいことに関心を持つきっかけになるのではないかなと思います。

そういったことができる機会をもっと増やすとともに、高校生がもう少し海外に目を向ける、あるいは違うところに関心が持てるようなインターンシップだったり Student Exchange プログラムだったりということについても、もっと短い期間でいいので、積極的に考えて、１週間、２週間でもいいので考えてみると、そういったものに触れる生徒、子供たちをたくさん作ることでいろいろな関心を呼び起こして刺激になるのではないかなと思いながら伺っておりました。

以上です。

○浜教育長　ありがとうございます。

では、北村委員、お願いいたします。

○北村委員　ありがとうございます。先ほど多様性が重要だということを申し上げましたが、やはり多様な考え方、多様な文化背景を持った人たちと出会う機会が、とても重要だと思います。そのため、今、宮原委員も交換留学のお話をされましたけれども、積極的に高校生たち、あるいは都立学校の生徒たちを海外に送り出すと同時に、やはり海外からも受け入れることが必要です。どうしても海外に送り出せる人数は限りがありますので、積極的に海外から、今、東京体験スクールなどもやっていますけれども、もっと受け入れて、しかもそれが例えば欧米などに偏らずに、アジア、中東、アフリカ、中南米といった、いろいろな地域から積極的に受入れをすべきだと思います。先ほどの UAE の生徒たちとの交流なども、非常によい取組だなと思います。そのように、多様な地域の若者たちと交流することの意味は何だろうと思うと、リンガ・フランカとしての英語というのはあると思いますので英語の重要性は当たり前なのですが、英語だけにとらわれず、様々な言語や文化と触れ合うことが大事ではないかと思うのです。

例えば、このような話を聞いたことがあります。それは、東京ではない他の県の学校での話なのですが、ブラジルからの移民の生徒さんがいる学校で、その子のお母さんに学校に来てもらってブラジルのことを紹介してもらおうと考えた先生が、国際理解教育としていいだろうということで、そのお母さんに「学校でブラジルのことを英語で紹介してください」と言ったのです。これはもう外国人イコール英語だと思い込んで頼んだわけですが、当然ながらお母さんは、ポルトガル語は話せますが、英語は話せない。でも、日本では外国人というと英語を話す人になってしまっているところがあるのだなと。でも、それはしようがないところもあると思うのです。それまであまり外国人と出会ったことがなければ、多様性を実感できなかったのだ

と思います。いろいろな価値、いろいろな背景の人たちと実際に出会ってこそ初めて、世界はこうだ、こんなに多様なんだと理解できると思いますので。そこで、是非東京の教育現場でもいろいろなことを積極的に取り組んで、特に様々な背景を持った人たちとの交流を深められたらいいなと願っております。

○浜教育長　ありがとうございます。

　では、山口委員、お願いいたします。

○山口委員　古賀さんのお話の写真でも非常に様々な海外の方との交流があられたという話がありましたけれども、やはり高校生たちに都立高校などでそういう環境を何とかもっと作れないかなと考えています。都立高校では在京外国人の枠を設けていたり、あるいは海外への留学なども進めていますが、受入れということに関しては、日本の場合は高校というよりはやはり大学が主だと思うのです。その辺りでできれば高校でもう少しできないかなと。行くとなると何人かしか経験できないものが、来てもらえば、クラス中でその人たちを共有できるというのもありますし、ふだんからそういったダイバーシティに触れるということができるので、なかなかハードルは高いとは思いますけれども、日本人も行けるので、こちらが来ていただくというエクスチェンジが何とかできないかなと思っています。

　それから、先ほどの自己肯定感の話でもそうですけれども、やはり早い段階で日本人であったりアジア人が国際社会でも活躍できるとか受け入れられるんだという感覚を持てるような機会があったらいいなと思います。そのことで自分の価値を高めて、自分が活躍できるイメージを持たせる、そういった機会を何とかできないかなと考えています。「今どきの若い子」と言われますが、若い子たちは非常に可能性と能力が高い子たちが多いので、あとはやはり環境だと思いますので、都立高校を中心に何とかそういう環境を作っていければなと思っています。

○浜教育長　ありがとうございます。

　いろいろ意見が出ましたが、知事、いかがでしょうか。

○小池知事　まず古賀さん、大変御自分のこれまでの御経験やお姉さんへの思いなど率直にお話しいただきまして、誠にありがとうございます。そういう中で、海外で生活をして、いかにコミュニケーションを取ることが大事かということを本当に率直にお話しいただいて、すごく伝わってまいりました。

　結局、日本の状況を見ますと、日本人同士はまず、あうんの呼吸で済んで、また空気を読むということに長けているといいましょうか、それを同調圧力と言ったりもしますけれども、しかし、その中にいると、確かにコンファタブルなのですけれども、そこから外に打って出ると

いうにはあまりにも楽過ぎて、結局、海外留学も最近は海外へ行くと怖いんじゃないかとか、ましてや円安という別の問題が出てきましたから、チャンスを失うのはすごくもったいないなと思っています。

結局、日本語の壁が、今、日本全体の海外に打って出るような勢いをそいでしまっているのではないかな。これは別に何か国際会議で云々とかそういう話ではなくて、ビジネス一つ取ってもチャンスを失うことになりはしないか。そのチャンスを失っていることにさえ気付かないというのはもっともったいない話だと思います。おっしゃるように、豊かな国際感覚を身に付けるということは、地理とか――ジオグラフィのほうですよね。それから各国の情勢など、断片的ではなくて、ちゃんと１つずつ学んだり、そこの人と仲よくなったりとか、いろいろなチャンスを作ることによって、その人自身も人生のチャンスが増えるし、また、それを得ることによってむしろチャンスをなくさないというところにたどり着くのではないかなと思っています。それこそ教育の場で教えていただくこと、それから、古賀さんの場合はそうやって御家族の中でもまれながらいろいろと自分自身で見つけていったりということだと思います。

教育こそ未来への投資でございますので、そういう意味では、これからの子供たちがいろいろな機会を得る、そのためのツールであったり、そのための学びをこれからも豊かにしていくことが必要なのだと、委員の先生方、そして今日の古賀さんの話を伺ってそのようなことを感じたところでございます。

○浜教育長　ありがとうございました。

限られた時間ではありましたが、大変有意義な意見交換、協議の場となったかと思います。本当にありがとうございました。ちょうど今、来年度以降の取組につきまして検討を進めているところでございますので、今日の議論も含めまして、さらに都立高校での取組を充実させる検討を深めてまいりたいと思います。知事にも予算もしっかりつけていただいて取組を進めてまいりたいと思いますので、教育委員の皆様には引き続き御相談しながら進めてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

残念でございますけれども、時間がございませんので協議は以上とさせていただいて、最後に、今日せっかくこういう形で機会を設けさせていただきましたので、今年度、都として知事部局と組織横断的に取り組んでいる施策について簡単に御紹介させていただきたいと思います。

今年度は、「未来の東京」戦略や東京都子供基本条例を踏まえ、新たに発足した子供政策連携室を中心として、既存の枠組みでは対応が難しい課題を抱えた子供たちへの支援について関係部署と連携した取組を実践しております。中でも日本語を母語としない子供たちへの支援に

つきましては、都立高校で在京外国人生徒を対象とした募集枠の設置や日本語指導外部人材活用事業を実施しています。また、多文化共生スクールサポートセンターを新たに設置し、外国人生徒等の日本語の習得を支援するとともに、円滑な学校生活を送るのに必要な取組を実施しています。また、区市町村立小中学校における日本語学級設置校への教員加配を行ったり、外国人児童生徒への教育相談事業を行ったりしています。

ヤングケアラーにつきましては、早期発見に向けた取組として教職員の対応力の向上を図るために、学校の役割や具体的取組をまとめたリーフレットや教職員向けの相談窓口を新たに設置いたしました。

ユースヘルスケアについては、思春期特有の健康上の悩みに対応するため、都立学校において産婦人科医を臨時学校医として任用し、対面やオンラインで生徒及び保護者の相談に対応する取組を新たに始めるとともに、産婦人科医を招へいした特別授業を実施します。また、福祉保健局が新たに開設した相談窓口「わかさぽ」について周知し、活用を推進します。今後も引き続き関係各局と連携し、誰一人取り残さない視点から子供へのサポートを強化してまいります。

続きまして、子供を笑顔にするプロジェクトの実施状況について御報告をいたします。このプロジェクトは、新型コロナウイルス感染症の影響で様々な制約のある学校生活を送ってきた子供たちに多様な体験機会を通じて笑顔を取り戻し、前向きな気持ちで学校生活を送ってもらうことを目的に今年度立ち上げた事業です。都内全ての学校を対象にスポーツや芸術鑑賞、自然体験などの幅広い体験プログラムを提示し、各学校がそれぞれの特色や実情を踏まえ選択するほか、学校による独自企画にも対応する枠組みとなっています。現在、約８割の公立学校から申込みを頂いており、都内各地の学校で多様なプログラムが実施されています。実際の様子を御紹介いたしますので、映像を御覧ください。

（動画再生）

各学校では様々なプログラムが行われております。一部御紹介しますと、左上の写真ですが、ゲーム感覚で課題解決に取り組むチームビルディングという体験です。これは山梨県で実施されたものですが、ふだんとは異なる環境で生徒たちが仲間と協力し、アイデアを出し合い、主体的に活動する様子が見られました。右上の写真は、アフリカンアーティストと特別支援学校の児童生徒がアフリカンドラムを用いて言葉を超えて一体となって演奏する体験をしました。

本プロジェクトを通して子供たちからは、「コロナ禍でつらいこともたくさんあったけど、元気が出た」「パラスポーツを応援したいと思った」などの感想がありました。また、特別支

援学校の保護者からは、「親子で貴重な経験ができ、笑顔になりました」といった感想が聞かれました。また、会場の丁寧なアテンドや施設のバリアフリー対応への感謝の声を頂きましたことから、会場となった東京ドームに感謝の手紙をお届けしたところ、スタッフの方々の励みとして今も職場で大切にされているとのお話がありました。また、山梨県における校外活動では、地域の方々から「このような機会に子供たちが来てくれると地域が活性化する」という歓迎の声を頂きまして、笑顔の輪が広がっているということを実感できております。また、学校教育や子供の心理に関わる有識者の方からも「子供の自主性や思いやり、他者理解を深める取組である」という高評価を頂いております。本プロジェクトの多様な体験を通じて子供たちが笑顔になり、その笑顔が周りの人々を笑顔にし、社会全体を明るく動かしていく、こうした取組を引き続き進めてまいりたいと思います。

以上でございます。

大変駆け足の進行となって恐縮でございますが、それでは、最後に知事から会の締めくくりの御発言をお願いいたします。

○小池知事　改めまして古賀さん、プレゼンテーションありがとうございました。そしてまた、委員の先生方にはそれぞれ貴重な御意見を頂きまして、誠にありがとうございます。今、教育ほど大切なものはございません。人をいかにして育てていくのか、人がいかに幸福に、そして自己達成ができる社会を作っていくかということが重要でございます。

東京都教育施策大綱におきましても、誰一人取り残さず、全ての子供が将来への希望を持って自ら伸び、育つ教育を目指しております。本日、協議をお願いいたしましたグローバル人材の育成も、大綱における重要な事項の１つに位置づけているところでございます。そして、御覧いただきましたように、子供を笑顔にするプロジェクトも一つずつそれぞれ学校の工夫なども凝らされていて、きっと忘れ得ぬ時を子供たちに与えていると、そういう機会になっていると思います。

この教育の方向性を都の教育委員会と共有しまして、その取組を今後も後押しすることで、子供たち一人一人の個性、そして能力を最大限に伸ばすことができますように東京都を挙げて取り組んでまいりたいと考えておりますので、どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

○浜教育長　ありがとうございます。

本日は「グローバル人材の育成」というテーマで御協議を頂きました。誠にありがとうございます。また、古賀様、大変貴重なお話をありがとうございました。本日の議論を踏まえまし

て、教育委員会としてまた引き続きしっかり取り組んでまいりたいと思いますので、委員の皆様方、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、以上で本日の会議を終了いたします。円滑な進行に御協力を頂きまして、誠にありがとうございました。